

ノ砌ニ、奇特不思議ヲアラハサルベキトカテ仰ラレ事ナリ。マコトニ權者ノ御事ナレバ、カヤウノ御詞ヲ仰オカレ候ト、御往生已後イヨク感ヲモヨホスバカリナリ。

一、十八日ノ仰ニハ、我ナキ跡ニ、兄弟中、思アヒテ中ヨクアルベシ。信心ダニ一味ナラバ、中モヨク聖人ノ一流モ繁昌スベシト、クレク仰オカレ侍リキ。又今日ヨリ御脉スコシナリ候ヨシ、醫者衆申ケリ。

一、十九日ヨリハ、オモ湯良薬ヲモイヤト仰アリテ、マイラザリキ。タゞ御念佛バカリニテ、早御往生アリタキトノ御念願トゾ仰ラレ侍ケル。

一、二十二日ヨリ御相好スコシツ、カハルヤウニミエ、則開山聖人ノ御相好ニ似サセラレタマフヤウニ、御兄弟中モ其外イツレモ、同ジ心ニ見奉リ侍ル由申ケリ。

一、二十三日ヨリハ御脉モナク候間、ハヤ御往生カト皆申アヒ候ヒツルニ、又八ツ時ヨリ御脉出デナオリ候ヨシ、醫者衆申ス。不思議ト各申侍リキ。

一、二十四日ノ曉ハ、御往生ノ時分ナリトテ、法敬坊モ空善モ御ソバ近クマイルベキ由仰ニヨリ、右ノ御手ヲ法敬坊カ、ヘ戴キ申サル。空善ハ兩ノ御足ヲカ、ヘ申イタゞキ奉ル。兩人トモニ、心モ目モクレ、落涙申サレキ。

一、二十五日ノ午ノ正中ニ御往生。イカニモシツカニ御子ムレルガゴトクニテ无病无煩ニ念佛ノ御息トマリ給ケリ。寺内寺外、道俗男女マデ參集シテ、歎キ申コト限リナシ。御近所ノ君達ノ御愁嘆ハ、コトノ葉モナク、千々萬々申モオロカナリ。則其日ヨリ種々ノ不思議奇瑞マシクキ。二十五日ノ曉ヨリ天地震動セルコトシキリナリ。是ヲ如何ニト申セバ、權者明匠ノ入滅ノ砌ニハ皆如此トゾ申。マツ傳教大師入滅ノ時モカクノゴトシ、弘法大師入定ノ時モ

同ヨシ申傳へ、皆傳記ニシルセリ。二十五日ノ午ノ尅ニナリシカバ、山科郷内、野村御居住ノ前後左右、殊ニ御堂ノ前後左右ノ草木ノ若葉ノ立タルモ悉クシホレ色モ變ジケリ。言語道斷、奇代不思議ナリ。マコトニ前代未聞ノコト、人ミナ感ジタマヘリ。

一、二十五日ノ朝晝夕べト、三ケ度日ノメグルコトケシカラズ。日ノ廻リニ紫雲五色ニタチワタリ、空花ハ雪ノフルガゴトシ。四月二日マデ七ケ日同前也。

一、御葬送ハ四月二日タルベキ由ヲ申フレタレドモ、御往生ノ明ル二十六日ナリ。俄事ナレドモ、大坂ヨリ道具ハ何モ御用意アリテ持セラル、間、用意造作ト云事少モナク候キ。去程ニ二十五日夜更テ、二十六日ノ曉御行水マシ、御勤アリ。實如上人御調聲ツ子ノゴトシ、ハヤク御葬禮アルベキハ、御名殘オシミカナシミ奉輩、老若貴賤多シトイヘドモ、御遺言ニマカセ御

イソギ候。

一、日來ノ好ミナレバ、各ニ見ヘラレタクモアリ、又見度モオモハントノ御遺言ナリトテ、二十六日朝常ノ御出立ニテ御衣袈裟メサセ、木念珠ニ助老ヲツカセ給テ、曲祿ニメサセ、丹後兄弟慶聞坊已下カキ出シ奉リ、開山聖人ノ御右、南ノ方ニスヘオキ奉ル。御兄弟中、各御供ニテ御出アル。平生ノ御顔色ハ一向各別ニオハシマスガ、今日ハ開山親鸞聖人ト只同ジ御顔形ナリ。不思議ノ事共也。併親鸞聖人ノ再誕ニテマシマスト云事、今アキラカニオモヒアハセル事ナリ。諸萬人拜タテマツリ、各涙ヲナガシ、マロビタラレカサナリテ歎キ悲シメル有様、見ルニ氣ヲウシナフノミナリ。サテ其後ヤガテ御歸アリテ、各ヨシラヘマシ、御闇維午時尅也。供奉ノ僧衆ソノ外數萬人群集セリ。マコトニ路念佛常ナラズ、聲佛事ヲナセルヨソホヒ、老若貴賤涙ニムセビケリ。カクテ

井子ヘン ケフリ タテマツ ケフリウチ ハクロ チウマン
 一片ノ煙トナシ奉ル。煙ノ中ニ白鷺充滿シ、トビメグリヌ。白龍現ジテ暫煙ヲ
 サラズ。是 コレシカシナガラケチエン 併 コシクワウ 結縁ノユヘカ、又ハ愁傷ノ心ナルカト皆人申アヘリ。空花ハ
 ユキ ニチクワウ 雪ノフルガゴトシ。紫雲ハ日光ノメグリニ五色也。天ヨリフル蓮花ノ廻リ大サ一
 シヤク ゼンダイミ 尺アマリトミユ。前代未聞奇代不思議ノヨソホヒナリ。又大坂ノ御堂ノ上ニモ
 レンゲエフリクダレ リヤウシヨ 蓮花降下ト云。兩所トモ二一七日ノ間、空花モ紫雲モヤマズ、希有妙義ノ
 ゴサウシヨ ヒト 御葬所ト、人ミチ感ケリ。

一、御拾骨ハ二十七日ノ朝、御兄弟中、各ヒロイ申サセラレケル。常ノハ不
 ジヤウニホ ナラヒ 淨ノ匂ヒアル習ナルニ、サモナク、カンバシキニホヒ、イヨク不思議ナリ。則二
 十七日ヨリ御中陰始マル、別紙ニ記レ之。

一、四月十七日御結願、其中ハ御堂勤行ノ後、御亭御中陰ノ間ニシテ、
 オキヤウ井チクワン ノチゴシヤウ 御經一卷ノ後勤行アリ。又御往生間ニテ御ツトメアリ。三ケ度ツ、ノ行事ナリ

諸家ヨリ香奠、諸宗ノ諷經、願文御經、御吊諸萬人群集カギリナシ。

一、山科ノ御坊ハ、文明九年御建立。享祿三年七月二十四日炎上。但

シ五十年ノ間 繁昌アリ。

一、大坂ノ御坊ハ、明應五年御建立。天正八年八月二日炎上也。七十

五年ノ間 繁昌ナリ。

天正八年九月中旬清書之

蓮如上人御物語卷之下 終

歌

謠

いろは歌

いく度も、聞くにあかぬは、法の道。

そむればいづる、しんじむの色。

ろく道に、ひく業障の、つなをさる。

劔也けり、みだの名號。

はづかしと、とはであやまる、法の道。

ふみ迷ふべき、人ぞはかなし。

にせものは、かはり安きに、かはらぬは。

まことの信の、しるしなりけり。

ほのくそ、心にうかぶ、稱名の。

いろは歌

ほかよりふかき、信心もなし。
 へいせいにて、佛の恩を、むねにわた。
 外にまつべき、來迎もなし。
 となふれば、恨くやみの、雲はれて。
 むねにはのこる、しんじむの月。
 ちしきより、迷のやみの、手をひかれ。
 今はかゝやく、花にこそすめ。
 りこんなる、人をうらやむ、心こそ。
 彌陀のちかひを、しらぬゆるる也。
 ぬれてほす、たもとはのりの、涙にて。
 佛の恩を、しる人ぞしる。

るてんして、又あひがたき、みのり也。
 れろそかにきく、人ぞかなしき。
 をひぬれば、心かたちも、よはりゆく。
 後世の願ひも、わかきうち也。
 わが身をば、徒ものごと、思ふべし。
 よしとれもへば、自力なりけり。
 かゝる身を、助たまふの、嬉じさを。
 常にれもふを、憶ねんといふ。
 よしあしの、心につけて、念佛の。
 口に絶ぬを、相續といふ。
 たのむ機を、我さとむかし、迷ひけり。
 いろは歌

他力たうりきになれば、我わがものはなし。
れんげ座ざに、のりうるまでは、唱なまへつ。

佛ほとけの恩おんを、ふかくほうせよ。

そしるまじ、たとひとがある、人ひとなりと。

我わがあやまりは、それにまされり。

つみとがの、うすくなるとは、覺たぎねど。

佛ほとけの恩おんぞ、ふかくしらる。

ねん佛ねんぶつの、かすにはよらぬ、信しんなれど。

信しんにはかすの、ねほさねん佛ねんぶつ。

なむの二字にじ、十八願じゅうはちがんの、かなめなり。

たのむころを、たまはりにけり。

らくの土つちを、昔むかしはいそぐ、心こころなし。

今いまはたのしむ、信心しんじんのはな。

むつまじき、人ひとのひがめる、教たしなには。

かならずそれに、うつるよの中なか。

うきことを、よろこぶ信しんも、あるものを。

いのり心こころを、やめよみなひと。

あまはしと、思おもふ心こころは、れのづから。

穢ね士しをいとほぬ、しるしなりけり。

のちの世よを、願ねがふころの、ふかければ。

此このよのつみも、うすくなるべし。

れのづから、口くちにうかむも、たしなむも。

いろは歌

我機そはねば、みな他力なり。
くもるごも、くらくはあらし、みだ頼む。
人はかくやく、むねの月かげ。
やまひある、身に稱名の、をこたらば。
つねのけだいは。思ひしらる。
まうねんの、ねこるにつけて、となふれば。
妄念きへて、あさはねんぶつ。
けだいは、まことのうすき、心ぞと。
くゆるころろを、がいけとはいふ。
ふしぎより、ふしぎと思ふ、心こそ。
彌陀のちがひの。至極なりけり。

この度は、迷ひさどりの、わけめなり。
あつささむさも、いごふへまかは。
居士ながら、こゝもはちすの、臺なり。
彌陀たのむ身は、ねがめうれし。
てらかねを、のりのすゝめと、思ひつ。
さくにつけては、となふへま也。
あさましと、思ひながらも、妄念の。
やまぬにつけて、たふとかりけり。
さためなき、浮世の中に、定まるは。
彌陀たのむ身の。さとり也けり。
まものりも、なむあみだ佛の、うちにあり。

我機をそふる、人そ危き。

ゆめにだに、佛を拜む、こころこそ。

ごびにわすれぬ、人といふべし。
めぐめたり、人あしかれば、なにはがた。

我身にとがの、かへるしらなみ。
みのとがは、くいてもやまぬ、身なれども。

悔る心を、をこすべきなり。
しらすとも、知るに同じと、あやまりて。

教をさかぬ、人ぞかなしき。
あがたきは、他方の信と、さくものを。

たふさむべきは、むねのしんじん。

ひとごごに、くせをは笑ふ、よの中に。

うらやむべきは、念佛のくせ。

もらさじと、廣さちかひの、あればとて。

たくみてつくる、罪はゆるさず。

せいぐわんの、ふしぎならずば、いかにして。

疑はるゝ、身とはなるべき。

すゑのよの、法のれしへの、いろは歌。

なからんあとの、かたみともなれ。

(以上の四十首は文明年中赤尾の道宗のためによませ
たまふとなん越前吉崎の法雲寺に御置筆あり)

いろは歌終

國府津

次第の夢のたいちにまがひつゝ。昔や今になりぬらん。ワキ詞
是は都方より出たる一向專修の念佛者にて候。扱も我祖師東關のさ
かひに。二十餘廻の星霜をかさね。邊鄙の群萌を濟度せしむ中にも
相州足下の郡江津に。七年御座をしめ給ふ靈場なれども。いまだ參
詣申さず候程に。此度思立。彼遺跡へと趣き候ふ。道行。草に行露に
宿りていさなごる。海山かけて立雲の。いや遠ざかる旅衣。
さのふと明しけふと暮。かはにあるじの宿を。こねてさ川の程
もなく。江津の里に着にけり。荒嬉しや是は早。相模國江
津にて有げに候。所の人を相待。御舊跡を尋ふするにて候。

よしさらば。我とはさいじ海士小船。みちひくしほのなみにまか
せて。朝には愛欲の廣海にすなごり。暮には名利の大山に木
こる。二人。こり果もせぬ人界のわしる心はかはれ共。世を過る道はひ
とつなる。浮身のふけをしらずして。末の闇路をいかにせん
下歌の野にたてる枝なき木にも劣けり後の世しらぬ人心。流れゆく。
水に玉なすうたかたの。あはれはかなき世の中に忿々として
年命のついまるを覺わす白浪のかへるも同じ家路かな。屋
是に見馴申さぬ御方の渡候ふよ。さん候。當所始て一見の者に
て候。眞樂寺とやらんを御教候へ。又石の名號勸堂のいはれを
も承度社候へ。安き間の御事。あらく語つて聞す申候べ
し。扱も古へ開山上人。此所に御逗留の折節。來朝せる唐船の中

に。高さ七尺横三尺餘の靈石あり。則ち天竺佛生國の石なればとて親鸞みづから御指を以て二つの尊號を十字八字にあそばされしを。石の名號と申奉り。安置せる所を。則眞樂寺とは申候。されば御在世の昔。往生の一途を教化し給ふ。其堂場の跡也とて。あれなる松の木の間。に草村の御座候を。今に勸堂とは申習はして社候へ。まづ日も暮に及候程に。今宵はわが住管屋に御泊り有。明なば御堂へ案内申候べし。近比御心ざし有難う候。とをく通ずるに四海皆兄弟と有り。増てやかやうに宿因(善トモ)のふかき情の露の薤に一夜をあかし候べし。シテ中々の御事御逗留候へ。承り候。早夜も明て候へば。勸堂へ參度候。なふ御覽せよ爰は元來こよるぎの磯邊につづくいうなつみ。ツレまた。又はあびきのいとまなき。シテ二人罪業に

のみ朝夕まごふ身たりながら。助る法の道しあらば。夜もすがら結縁に聽聞申度候。實に是社肝要の御尋なれ。凡念佛の一行は。更に俗事をさまたげず。をのれくのいとまみの。惑業ふかきやからには。生死大海の願船有。罪障ぞもき病には。大悲弘誓の妙藥あり。シテ詞超世別願の綱には。迷倒の衆生をすくひ。西方淨刹のつりばりには。稱名の群品を引給ふ。上歌扱こそ不思議の願海に。衆惡の萬川歸しぬれば。功德のうしほに一味安心の。みのりにあふとは。かたきが中に猶かたき。石の面にのこされし歸命盡十方。無尋光如來あるひは。南无不可思議光佛。此名號を一聲となふれば。頃億劫の罪をのぞく。廣大の利益に。あづまの奥床しくぞ。ねもほゆる是も。いしぶみの御筆の。ありつる獵師はす

なはち。西にかげろふ夕月の光のうちに入にけり。中入シカク
 是につけても稱名の。報謝の勤めれたたらず。いと誓
 ひを頼むこそ。うへなき道のしるべなれ。後シテ一度も。南无
 阿彌陀佛といふ人の。蓮のうへに。のぼらぬはなし。夫一代の
 佛法は。如來果海の慈悲より出て。流義さまに別れ。法門無盡
 なれども。其急要を論するに。浄土の道を最とし。諸教ひろしとい
 へども。其肝心を取るに。他力の宗を勝とせり。然れば念佛
 三昧は。世尊興世の本懐。十方諸佛證誠の。御舌をのべて三國
 名師もほめ給ふ。殊に末世相應の要法。萬機成佛の捷徑たり。
 高山の水は。深谷にくだる能あり。彼六字の名號の修しやすく
 して功高く。行じやすくして利ふかし。いか成十惡。五逆のともが

ら。屠沽の下類に至るまで。たのむ一念の露を結べば。攝取の月か
 ならずうつり。不捨の誓約むなしからず。彼國に生れて無量の樂を
 うくる也。彌陀は兆載永劫のその間。无善のわれらにかはりて。
 願行をはげまし。釋迦は五百塵點久遠より。八千度まで往來し。
 穢惡の凡愚をあはれみ。本願眞實のことはりを。三部の妙典にあら
 はして一乗の機をすゝめけり。此法を只一言もとく人は。四方の
 ほとけのつかひならずや。去程に。世くだり人つたなふして。難行
 の小路まよひやすきにより。易行の大道ををしひらきて。凡夫直入
 の教をひろめ。なを末代をかながみ。御身を俗塵にひとしくすゝめ
 堂の。風になびく草のごとく。信順の門葉世々にはびこり念佛の緇
 業日を追て。さかんなり。かたじけなくも此國は。彌陀有

縁ゆかりの閻浮提えんぶだい。彼のか一佛いつぶつの悲願ひがねんに。歸かへりするものあれば。諸天善神守護しよてんぜんしんしゆりしたまふ。そのまことに乗のりすれば。本地ほんぢのかたちをあらはし。寂光じやくくわうの月つきかげは秋津洲あきつしうのなみに宿やどし。報身ほうしんのはなぶさは。葦原あしはらのかせにほごこす。舞マヒみしめ繩なは。たいながき世よを。こゝろにかけ。このふれば。く。こゝろにゐながら極樂ごくらくの。聖衆しやうじゆの數かずに。いるぞうれしきうれしや。かゝる信樂しんげうをうる事は。猶なほ靈瑞華れいずいけのまれにして。とをく宿縁しゆゑんをよろこび。歡喜くわんぎのたもとをしきたねの。夜よはほのくごとなりけり。

(此ノ諸曲ハ、蓮如上人御作并ニ御筆トシテ相摸國ノ足柄下郡國府津村眞樂寺ニ傳フルモノナリ)

國 府 津 終

附 録

慧燈大師年譜

南條文雄記

- 一歲 應永二十二年乙未（稱光天皇即位後第三年、將軍足利義持就職後二十二年、明ノ太宗永樂十三年、西曆紀元後一千四百十五年）二月二十五日大師京都大谷本願寺ニ誕生シタマフ、幼名布袋麿、又幸亭麿ト號ス、父ハ本願寺第七世存如上人諱圓兼、母ハ何國ノ人トモシラズ云ト遺徳記ニ記セリ
- 二歲 應永二十三年丙申（是歲上杉氏憲亂ヲ作ス）
- 三歲 應永二十四年丁酉（氏憲ヲ討ジテ之ヲ平ク）
- 四歲 應永二十五年戊戌（足利義持其弟義嗣ヲ殺ス）
- 五歲 應永二十六年己亥
- 六歲 應永二十七年庚子十二月二十八日大師ノ母公眞宗再興ノ事

ヲ獎勵シテ去ル (是歲淨土宗鎮西派第七祖傳通院開基了譽寂ス)

七歲 應永二十八年辛丑

八歲 應永二十九年壬寅

九歲 應永三十年癸卯 (足利義量將軍ニ任ゼラル)

十歲 應永三十一年甲辰

十一歲 應永三十二年乙巳 (明ノ仁宗洪熙元年、西曆千四百二十五年足利義量薨ス)

十二歲 應永三十三年丙午 (明ノ宣宗宣德元年)

十三歲 應永三十四年丁未 (赤松滿祐足利氏ニ反ス)

十四歲 正長元年戊申 (正月足利義持薨ス、四月二十七日改元七月稱光天皇崩ス、壽二十八)

十五歲 永享元年己酉 (九月五日改元、是ヲ後花園天皇元年トス、足利

義教將軍ニ任ゼラル) 大師始メテ眞宗再興ノ志ヲ立テタマフ

十六歲 永享二年庚戌

十七歲 永享三年辛亥、大師中納言廣橋兼郷ノ猶子トナリ、青蓮院尊應ノ室ニ入リテ得度シ、中納言兼壽、法名蓮如ト號ス、ソレヨリ以來學問ニ心ヲ盡クシ、奈良ノ大乘院經覺ニ從テ法相宗ヲ學ボタマフ

十八歲 永享四年壬子

十九歲 永享五年癸丑

二十歲 永享六年甲寅

二十一歲 永享七年乙卯 (西曆千四百三十五年)

二十二歲 永享八年丙辰 (明ノ英宗正統元年)

二十三歲 永享九年丁巳

二十四歲 永享十年戊午

二十五歲 永享十一年己未

二十六歲 永享十二年庚申十月十四日本願寺第六世巧如上人遷化シ
タマフ、年六十五(是歲増上寺開基西譽寂ス)

二十七歲 嘉吉元年辛酉(二月十七日改元)存如上人本願寺第七世ノ
住職ト爲リタマフ(是歲六月赤松滿祐將軍足利義教ヲ殺ス、
八月勅シテ滿祐ヲ討ス、十一月足利義勝將軍ニ任セラル)

二十八歲 嘉吉二年壬戌

二十九歲 嘉吉三年癸亥(足利義勝薨ス、南朝ノ遺臣神器ヲ奪フ)

三十歲 文安元年甲子(二月五日改元、南朝ノ遺臣叡山ニ據ル)

三十一歲 文安二年乙丑(西曆千四百四十五年、是歲細川勝元管領ト
ナル)

三十二歲 文安三年丙寅

三十三歲 文安四年丁卯五月大師東國ニ之キタマフ(是歲一條兼良關
白トナル、足利南朝ノ皇子ヲ殺ス)

三十四歲 文安五年戊辰

三十五歲 寶徳元年己巳(七月二十八日改元)大師北地ニ下向シタマフ
(是歲足利義政將軍ニ任セラル)

三十六歲 寶徳二年庚午(明ノ景帝景泰元年)

三十七歲 寶徳三年辛未

三十八歲 寶徳元年壬申(七月二十五日改元)

三十九歲 享徳二年癸酉(關東亂ル)

四十歲 享徳三年甲戌(細川勝元、畠山義就ヲ逐フ)

四十一歲 康正元年乙亥(七月二十五日改元、西曆千四百五十五年)

四十二歲 康正二年丙子

四十三歲 長祿元年丁丑(九月二十八日改元、明ノ英宗重祚天順元年
六月十八日(康正三年)存如上人遷化シタマフ、年六十二、大
師本願寺第八世ノ住職ト爲リタマフ(是歲四月八日武藏江戶

城成リ、太田道灌始メテ品川ノ館ヨリ移リ居レリ

四十四歳

長祿二年戊寅八月十日實如上人誕生シタマフ(南人神器ヲ擁シテ吉野ニ據ル、赤松氏神器ヲ獲タリ)

四十五歳

長祿三年己卯(是歲閣龍伊太利亞部中熱弩亞ニ生ル)

四十六歳

寛正元年庚辰(十二月二十一日改元)六月(長祿四年)大師近江金森ノ善從道西ノ爲メニ正信偈大意ヲ製作シタマフ

四十七歳

寛正二年辛巳、見真大師二百年ノ忌辰ニ當レリ、三月帖外御文一帖目第一通始メテ成ル、其文ニ曰ク、當流上人ノ御勸化ノ信心ノ一途ハ云々(帖外何帖何通トアルハスベテ慧空師所傳ノ本ニヨレリ智見附記)

四十八歳

寛正三年壬午

四十九歳

寛正四年癸未

五十歳

寛正五年甲申

五十一歳

寛正六年乙酉(後土御門天皇元年、明ノ憲宗成化元年、西曆千四百六十二年)正月叡山ノ僧徒大谷本願寺ヲ燒ク、大師祖像ヲ奉シテ近江大津ニ移リタマフ、案スルニ弘長二年(西曆千二百六十二年)ヨリ文永八年(千二百七十一年)マデハ大谷ノ祖廟ニ寺號ナシ、文永九年(千二百七十二年)久遠實成阿彌陀本願寺ノ號ヲ賜ハリシヨリ寛正六年(千四百六十五年)ニ到ルニ二百四年間ハ大谷即本願寺ナリ、此ヨリ後ハ數處ニ移轉シタマフ

五十二歳

文正元年丙戌(二月二十八日)改元帖外御文一帖目第二通成ル、凡親鸞聖人御勸化ノ一義ノコ、ロハ云云

五十三歳

應仁元年丁亥(三月五日改元)大師堅田ニ移リタマフ(細川勝元、山名宗全亂ヲ京師ニ作ス)

五十四歳

應仁二年戊子、大師住職ヲ長男順如上人ニ譲リ、重子テ東北ヲ行化シ、本宗寺ヲ三河土呂ニ創建シタマフ、四月中旬帖外御

文一帖目第三通成ル、オホヨソ當流ノ勸化ノ云云

四月二十二日夜第四通成ル、コノコロノ信心ガホノ行者云云

五十五歳

文明元年己丑(四月二十八日改元) 大師大津ニ還リ顯證寺

ヲ大津三井寺南別所ニ創シテ祖像ヲ安置シタマフ (是歳雪舟

五十六歳

明ヨリ歸朝セリ)

文明二年庚寅、大師攝津ニ之キ、界浦ニ抵リタマフ

文明三年卯四月中旬大津ヲ發シテ越前加賀ヲ經廻シ、七月

坊舎ヲ越前坂北郡吉崎ニ建立シタマフ、帖外御文一帖目第五

通成ル、文明第三炎天ノコロ云云

七月十五日帖内一帖目第一通成ル、或人イハク當流ノコロ

ハ云云

七月十六日帖外一ノ第六通成ル、文明第三初秋仲旬ノ頃云

云

七月十八日帖内一ノ第二通成ル、當流親鸞聖人ノ一義ノコ、

ロハ云云

九月十八日帖外一ノ第七通成ル、勢ヒキ、人ノイハク云云

十二月十八日帖内一ノ第三通成ル、マツ當流ノ安心ノオモムキ

ハ云云

五十八歳

文明四年壬辰、帖外一ノ第八通成ル、靜ニオモンミレハ夫レ人

ノ性ハ云云

十一月二十七日帖内一ノ第四通成ル、抑親鸞聖人ノ一流ニ

オヒテハ云云

文明五年癸巳二月八日帖内一ノ第五通成ル、抑當年ヨリ事

ノ外加州能登越中云云

二月九日帖外一ノ第九通成ル、抑昨日人ノ申サレ候シハ云云

三月大師正信偈三帖和讃ヲ梓行シテ晨昏勤行ノ式ヲ定メタマ

フ、本山藏版本ノ奥書ニ云ク

十

右斯三帖和讚並正信偈四帖一部者 蓮如上人爲末代興
隆板木雖被開之近代依破滅令再興而已

慶長四年己亥霜月日

教如

教如上人再興之舊本經於星霜印刻字弊故今還改補焉令
鏤梓矣

延寶第五丁巳歲仲春二十八日

常如

常如上人改補之版以經於百餘年字畫稍湮滅矣近欲改刻
而未果爰今年春洛陽有災煽熾及我堂宇此時彼版亦罹災
焉因今追摹舊本成新鑄云

天明第八龍衣戊申仲冬

乘如

四月二十五日帖内一ノ第六通成ル、抑當年ノ夏コノコロハ云
云

五月帖外一ノ第十通成ル、アル人々ハク昨日ハハヤ一日雨中ナ
レハニ云云

八月二日帖外一ノ第十一通成ル、ソモ〜コノ兩三年ノアヒタ
ニラヒテ云云

八月十二日帖内一ノ第七通成ル、サンヌル文明第四ノ曆云云
八月二十八日帖外一ノ第十二通成ル、文明第四十月四日亡
母十三回ニアヒアタリ候云云

九月帖内一ノ第八通成ル、文明第三初夏上旬ノコロヨリ云云
又第九通成ル、抑當宗ヲ昔ヨリ人コソリテ云云

九月十一日第十通成ル、抑吉崎ノ當山ニライテ云云
九月中旬第十一通成ル、ソレオモンミレハ人間ハ云云

九月下旬第十二三十四ノ三通成ル、抑年來超勝寺ノ門徒
ニライテ云云、抑チカコロハコノ方ノ念佛者云云、抑當流念佛者

年

譜

十一

ノナカニライテ云云

九月二十二日第十五通成ル、問テイハク當流ヲミナ世間ニ流布シテ云云

九月下旬帖外一ノ第十三通成ル、夫當流ヲ一向宗トワカイヘヨリモ云云

九月二十七日文明三年以後ノ御文ニ端書ヲ附ケタマフ、其文ハ帖外一帖目ノ終リニ在リ(智見云ク南條氏所藏十帖御文校本第二帖及越後本誓寺所傳ノ本第一帖ニハ別通トセ)

十日帖外二帖目第一通成ル、(帖外通シテハ第十五通ニ當タル、已下例知智見附記) 右兩三ケ年之間此當山ニ居占云云

十月三日第二通(第六)成ル、去ル文明第三之曆云云

十一月第三通(第七)成ル、定於眞宗行者ノ中ニ可ニ停止ニ子細ノ事云云

十一月二十一日第四通(第八)成ル、抑今月二十八日ハカタシケナクモ云云

十二月第五第六(第九)ノ二通成ル、或人申サレケルハコノ一兩年ノ間云云、夫人間ノ爲體ヲシツカニ案スルニ云云

十二月八日帖内二帖目第一通成ル、抑今度一七ケ日アヒタニライテ云云

十二月十二日第二通成ル、抑開山聖人ノ御一流ニハ云云

同日帖外二ノ第七通(第十)成ル、夫當流聖人ノ御門下ニヲヒテ云云

十二月十三日第八通(第十一)成ル、ソレ人間ノ體ヲツラク案スルニ云云

十二月十九日第九通(第十二)成ル、抑先年前住在國ノ時ノ教化ニヨリテ云云

六十歳

以上文明五年中ノ御文ハ帖内十三通ト帖外十四通トナリ(是歳三月山名持豊入道宗全卒ス、年七十、五月細川勝元卒ス、年四十四、十二月足利義尙(後義熙ト改ム)將軍ニ任ゼラル)文明六年甲午正月十一日帖内二帖目第三通成ル、夫當流開山聖人ノヒロメタマフ云云(神明ニケ條)二月十五日第四通成ル、夫彌陀如來ノ超世ノ本願ト申ハ云云

二月十六日第五通成ル、抑此三四年ノアイタニライテ云云

二月十七日第六通成ル、抑當流ノ他方信心ノヲモムキヲ云云(掟ノ御文)

三月三日第七通成ル、静ニオモンミレハソレ人間界ノ生ヲ云云

三月中旬第八通成ル、夫十惡五逆ノ罪人モ云云

三月十七日第九通成ル、抑彌陀如來ヲタノミタテマツルニツイ

テ云云

三月二十八日酉ノ刻吉崎坊舎焼失ス

五月十三日帖内二ノ第十通成ル、夫當流親鸞聖人ノス、メマ

シマス云云

五月二十日第十一通成ル、夫當流親鸞聖人ノ勸化ノヲモムキ云云(五重ノ義)

六月十二日第十二通成ル、夫人間ノ五十年ヲカンカヘミルニ云云

六月二十一日帖外二ノ第十通(第十四)成ル、夫親鸞聖人ノ一流ニ云云

七月三日帖内二ノ第十三通成ル、夫當流ニサタムルトコロノオキテラニ云云

七月五日第十四通成ル、夫越前ノ國ニヒロマルトコロノ云云

七月九日第十五通成ル、抑日本ニヲイテ浄土宗ノ家々ヲタテ、云云

七月十四日帖内三帖目第一通成ル、抑常流ニヲイテ其名ハカリヲ云云

八月五日第二通成ル、夫諸宗ノコ、ロマチノニシテ云云

八月六日第三通成ル、此方河尻性光門徒ノ面々ニヲイテ云云

八月十日帖外二ノ第十一通(第十一)成ル、抑コノ方北ノ莊一里五十町ノアヒタ云云

八月十八日帖内三ノ第四通成ル、夫情人間ノアタナル體ヲ案スルニ云云

九月帖外二ノ第十二通(第十二)成ル、夫文明第三ノ天五月仲旬ノコロ云云

案スルニ五月仲旬ハ四月上旬ニハ非ザル歟、帖内一ノ第八

通ヲ見合スベシ

九月六日帖内二ノ第五通成ル、抑諸佛ノ悲願ニ彌陀ノ本願ノ云云

十月二十日第八通成ル、夫南无阿彌陀佛ト申ハ云云

以上文明六年中ノ御文ハ帖内十九通ト帖外三通トナリ

六十一歳

文明七年乙未(西曆千四百七十五年)二月二十三日帖内三ノ第七通成ル、親鸞聖人ノス、メタマフトコロノ云云

二月二十五日第八通成ル、抑此比當國他國ノ間ニ於テ云云

五月二十八日第九通成ル、抑今日ハ鸞聖人ノ御明日トシテ云云

七月十五日第十通成ル、抑常流門徒中ニヲイテ云云(神明六ヶ條)

八月下旬大師吉崎ヲ發シ、舟ニ乘シテ若狭小濱ニ達シ、丹波

攝津ヲ經テ、河内茨田郡出口ニ光善寺ヲ創シタマヒ、又教行寺ヲ攝津富田ニ建テ、時ニ來往シタマフ

十一月二十一日帖内三帖目第十一通成ル、抑今月二十八日開山聖人御正忌トシテ毎年不闕ニ乃至コレニツイテ愚老コノ四五ケ年ノアヒタハナニトナク北陸ノ山海ノカタホトリニ居住ストイヘトモハカラサルニイマニ存命セシメコノ當國ニコエハシメテ今年聖人御正忌ノ報恩講ニアヒタテマツル云云

六十二歳

文明八年丙申正月二十七日帖内三ノ第十二通成ル、抑イニシヘ近年コノコロノアヒタニ云云
三月大師紀伊ニ之キタマヒ、信證院ヲ和泉界浦ニ創シテ眞宗寺淨尊ニ附シタマフ

七月十八日帖内三ノ第十三通成ル、夫當流門徒中ニライテ云云

六十三歳

文明九年丁酉正月八日帖内四帖目第一通成ル、夫眞宗念佛行者ノナカニライテ云云

九月十七日第二通成ル、夫人間ノ壽命ヲカソフレハ云云

九月二十七日第三通成ル、夫當時世上ノ體タラク云云

十二月二日第四通成ル、夫秋モサリ春モサリテ云云

大師善從ノ勸ニ從ヒ本山ヲ山城宇治郡山科ニ建テントシテ出口光善寺ヲ孫光淳ニ附シタマフ（是歲細川山名東西軍引キ還ル、應仁以來十一年間兵革相踵ギ京都ハ其戰區タリシモ是ニ至テ始テ平グ○魯西亞自立ス、和蘭王佛國人ト戰ヒ敗レテ死ス）

六十四歳

文明十年戊戌正月下旬大師地ヲ山科ニ相タマフ

二月帖外三帖目第一通（増三）成ル、夫當流念佛ノコ、ロハ云云

七月十五日第二通（増三）成ル、文明十年初春下旬ノ頃ヨリ云

云
九月十七日第三通(第九)成ル、夫人間ヲ觀スルニ有爲无常ハ云云

十一月第四通(第十)成ル、夫今月二十八日ノ聖人ノ御恩徳ノ
フカキ事云云

六十五歳

文明十一巳亥祖堂土木ノ事ヲ興シタマフ、十一月帖外三帖目
第五通(第十一)成ル、夫當流親鸞聖人勸化之一義ニ於テハ云云
十一月二十日第六通(第十二)成ル、ソレ開山聖人ノ尋本地云云
十二月第七通(第十三)成ル、去ル文明七歳乙未八月下旬之頃云云

六十六歳

文明十二年庚子六月十八日帖外三ノ第八通(第十四)成ル、抑三
川ノ國ニ於テ當流安心ノ次第ハ云云
七月二十七日第九通(第十五)成ル、抑大津山科兩所ノ人々ノ體

タラクラ云云

六十七歳

八月祖堂成ル、宗祖ノ眞像ヲ大津ヨリ迎ヘテ安置シタマフ
文明十三年辛丑六月佛光寺經豪大師ニ歸依シ、名ヲ蓮教ト
改メ、興正寺ヲ竹中莊ニ造ル、
十月帖外四帖目第一通(第十六)成ル、抑文明第十一之天夏ノ比
ヨリ云云

十一月二十四日第二通(第十七)成ル、夫於ニ當流之念佛行者ニ
云云

十一月二十四日第三通(第十八)成ル、抑今月二十八日ハ開山聖
人遷化ノ御正忌トシテ云云(是歳十一月一休宗純寂ス年八
十八)

六十八歳

文明十四年壬寅本堂モ亦落成ス、
八月二十八日帖外四帖目第四通(第十九)成ル、文明十四年壬

寅之春クレハ云云

十一月二十一日帖外四帖目第五通成ル、夫中古已來當時ニ
イタルマテモ云云

六十九歳

文明十五癸卯五月二十九日順如上人遷化シタマフ、年四十
二願成就院ト號ス、大師再ビ住職ト爲リタマフ、

十一月帖内四ノ第六通成ル、抑當月報恩講ハ云云(三ヶ條)

十一月二十二日帖外四ノ第五通(第十四)成ル、抑當月二十八日
者例年ノ舊儀ノタメ云云(三ヶ條)

十二月二十五日第六通(第十四)成ル、抑此去シヌル九月盡ノ頃ヨ
リ云云、

七十歳

文明十六年甲辰十一月二十一日帖内四ノ第七通成ル、抑今
月報恩講ノ事例年ノ舊儀トシテ云云(六ヶ條)

七十一歳

文明十七年乙巳(西曆千四百八十五年)十一月二十三日帖

内四ノ第八通成ル、抑今月二十八日ノ報恩講ハ昔年ヨリノ流
例タリ云云

七十二歳

文明十八年丙午正月帖外四ノ第七通(第十四)成ル、ソモノ能
美ノ郡同行中云云

同年中第八通(第十四)成ル、右親鸞聖人ノ一流ノ勸化ノコ、ロハ
云云

又帖外五帖目ノ第一通(第十四)成ル、抑今月二十八日ハ毎年爲
報恩謝徳云云(智見云慧空師所傳ノ本ニハ「文明十八
年、異ニ明應三年霜月二十一日トアリ)

十一月二十六日第十四通(第十四)成ル、抑今月二十八日報恩
講者云云(七ヶ條)

七十三歳

長享元年丁未(七月二十日改元)

七十四歳

長享二年戊申(明ノ孝宗弘治元年)

七十五歳

延徳元年己酉(八月二十一日改元)大師本願寺住職ヲ實如

上人ニ譲リ自ラ信證院ト號シタマフ

七十六歳

延徳二年庚戌帖外五ノ第十五通(増)成ル、抑當流ノ名ヲ自他宗トモニ云云

九月二十五日第十六通(増)成ル、夫人間ハユメマボロシノアヒタノ云云(是歳足利義植將軍ニ任セラル)

七十七歳

延徳三年辛亥

七十八歳

明應元年壬子(七月十五日改元、西曆千四百九十二年)大師本徳寺ヲ播磨英賀ニ、本善寺ヲ大和飯貝ニ創建ス、

六月(延徳四年)帖内四帖目第九通成ル、當時コノコロトノホカニ疫癘トテ云云

七十九歳

(是歳八月三日閣龍歐洲ヲ發シ、十二月十二日米國ニ達セリ)明應二年癸丑八月廿二日帖外五ノ第十七通(増)成ル、南无阿彌陀佛ノ六字不審ノ事云云(是歳足利義澄將軍ニ任セラル)

八十歳

明應三年甲寅

八十一歳

明應四年乙卯(西曆千四百九十五年)

八十二歳

明應五年丙辰九月大師坊舎ヲ攝津東成郡生玉莊大坂ニ創建シタマフ、十一月二十一日帖外五ノ第十八通(増)成ル、抑當所山科之村ニイカナル宿縁アリテカニ云云

八十三歳

明應六年丁巳(西曆千四百九十七年)帖内四ノ第十通成ル、イマノ世ニアラン女人ハ云云

五月二十五日第十一通成ル、南无阿彌陀佛ト申ハ云云

又帖外六ノ第一通(増)成ル、當流ノコ、ロハ一念平生業成トタテ、云云

七月四日第二通(増)成ル、御文クワシマヒラセ候云云

十月十四日第三通(増)成ル、(第四通亦大同小異ナリ)夫親戀聖人ノス、メタマフ安心云云

十月十五日第五通(摺六)成ル、夫常流聖人ノス、メマシマス云云
 十一月中旬第六通(摺七)成ル、夫關山聖人ノス、メマシマス云云
 十一月二十日第七通(摺八)成ル、夫關山聖人ノス、メマシマス云云
 十一月二十一日第八通(摺九)成ル、抑報恩講之事當年ヨリ云云
 十一月二十五日第九通(摺十)成ル、抑此在所大阪ニヲヒテ云云(是歲伊太利人アメリコウ米國ノ内地ヲ開ケリ)
 明應七年戊午(西曆千四百九十八年)帖外第六ノ第十五通(摺十一)成ル、南无阿彌陀佛ト申スハ云云
 二月二十五日帖内四ノ第十二通成ル、抑毎月兩度ノ寄合ノ

八十四歳

由來ハ云云
 四月六師疾アリ十一日第十三通成ル、夫秋サリ春サリステニ當年ハ云云
 同月第十四通成ル、一流安心ノ體トイフ事云云
 五月下旬夏ノ御文第一第二ノ二通成ル、抑今日ノ聖教ヲ聽聞ノタメニトテ云云、抑今日御影前へ御マイリ候面々ハ云云
 六月中旬第三通成ル、抑今年ハ既ニ前住上人ノ御正忌ニテ云云
 七月中旬第四通成ル、抑今月十八日ノ前ニ安心ノ次第云云
 十一月二十一日帖内四ノ第十五通成ル、抑當國攝州東成郡生玉ノ庄内大阪トイフ在所ハ云云(是歲七月九日華斯哥德ガ馬歐洲ヲ發シ、十一月二十日喜望岬ヲ回航ス)
 明應八年巳來(後土御門天皇即位後第三十五年、明ノ孝宗

八十五歳

年譜

弘治十二年西曆千四百九十九年二月二十日大師大坂ヨリ
山科ニ歸リタマフ、三月七日疾ヲツトメテ兩堂ニ詣シタマフ、九
日龍立ラシテ御文ヲ讀マシメタマフ、十日病中ノ容貌ヲ壽キ自ラ
題シテ曰ク

獲一念信 今詣安養 穢身永絶 法性速證

二十五日(大陽曆推步神武天皇紀元二千百五十九年五月
十四日)正午時遷化シタマフ、二十六日葬儀ヲ行ヒ、二十七
日遺骨ヲ拾ヒ、二十八日ヨリ四月十七日ニ到ルマデ中陰ノ念
佛勤行ヲ勵マシ耆闍ノ眞文ヲ讀誦スト云フ(是歲五月十九日
華斯哥德加馬印度甲谷他ニ達セリ)

大師滅後第二年 明應九年庚申後土御門天皇崩シタマフ

同第三年 文龜元年辛酉(二月二十九日改元)後柏原天皇踐祚

シタマフ

同第二十三年 大永元年辛巳(八月二十三日改元)天皇位ニ即キタマ

フ、實如上人黃金壹萬兩ヲ獻シテ其費ニ供シタマヒ、勅
アリ、門跡ニ准シ、永ク子孫ニ傳ヘシム

同第五十年 後奈良天皇天文十七年戊申(西曆千五百四十八年)

證如上人就職後第二十四年

同第一百年 後陽成天皇慶長三年戊戌(西曆千五百九十八年)准

如上人就職後第五年

同第一百五十年 後光明天皇慶安元年戊子(西曆千六百四十八年)宣

如上人就職後第三十五年

同第二百年 東山天皇元祿十一年戊寅(西曆千六百九十八年)一

如上人就職後第二十年

同第二百五十年 桃園天皇寬延元年(戊辰西曆千七百四十八年)從如

上人就職後第五年

同第三百年

三十

光格天皇寛政十年戊午(西曆千七百九十八年)達如上人就職後十七年

同第三百五十年

孝明天皇嘉永元年戊申(西曆千八百四十八年)嚴如上人就職後第三年

同第三百八十四年

今上天皇明治十五年壬午三月二十二日勅シテ慧燈大師ト諡シタマフ

同第四百年

明治三十一年戊戌(西曆千八百九十八年)現如上人就職後第十年

慧燈大師年譜終

蓮如上人全書附言

一全書正編ニハ、兩本願寺ユ久シク依用シ來レル八部ヲ收ム。

一全書拾遺ニハ、蓮如上人ノ御親撰、及ヒ御撰述ナルベシト傳フルモノニシテ宗意ニ違害セザル限リハ、成ルベク博ク網羅スルコト、セリ。

一漢文正信偈大意ハ、蓮如上人ノ異母弟圓光院蓮照應玄師眞筆ノ本ヲ、明治十二年雲澍院神興講師ノ、人ヲシテ寫サシメラレタルモノナリ。法要典據卷二十一ニ出テタル京都光隆寺所傳ノ正信偈注解トイヘルハ、蓋シ之ト同書ナラン。

一帖外御文ハ、五冊ノ縮刷刊本ニ依リ、南條博士所藏ノ光遠院慧空講師所傳(德母院良雄贈嗣講所寫)ノ六帖本、及ヒ木版活字三冊本ト、五冊大本トヲ對校シ、更ニ南條博士所藏ノ十帖御文校本ニ出テタルモノハ、異同ヲ比校シタリ。但シ、慧空講師所傳本ノ第一帖ノ初二ハ、夏御文四

通ト御俗姓御文一通トヲ收メテアリ、其他ノ異同ハ本文ニ記入セリ。

一帖外御文ニハ、調卷異同多キガ故ニ、南條博士所藏ノ十帖御文校本ノ例ニ倣ヒテ、全部通シテ八十二通トセリ。中ニハ一通アリヤ、二通ナリヤ、識別シガタキモノモアリシガ、嚴密ニ諸本ヲ對比シテ、之ヲ定メタリ。

一十帖御文其一ハ、越後高田本誓寺所傳、實如上人御集録ノ真本ニシテ十帖ノ中、今ハ後二卷缺ケテ傳ハラズ。古來、コノ本ヲ帖内編輯ノ爲ニ集メラレタル資糧ナリト云ヘリ。香月院深勵講師ノ時（享和二年壬戌九月ヨリ同二年五月四日迄ニ）慶海ヲシテ坊本始メ諸本ヲ對校シ、出沒ヲ明ニセシメラレタルモノ、予ガ伯父忻淨坊秀界ノ藏書中ニ在リ。乃チ帖内ト坊本トニ出テタルモノヲ省略シ、其他ハ順次ニ鈔録セリ。

一十帖御文其二ハ、南條博士所藏ノ十帖御文校本ヨリ鈔録セルモノナリ。同校本ハ、初ニ雲澗院神興講師所寫ノ慶海ノ編次凡例十三條（忻淨坊所持本ハ十四條）ヲ附シ、廣ク帖ノ内外ニ通シテ輯録セルヲ、今ハ帖内帖

外ノ刊本、及ヒ越後本誓寺所傳ノ真本ニ漏レタルモノ、ミヲ鈔録セリ。

一十帖本等ノ帖外御文ハ、越後本誓寺本ノ外、河内出口光善寺本、著屋勘兵衛本、越前金津永臨寺本、同三國淨願寺本、江州栗太郡出庭村西光寺本、濃州安八郡室原村安福寺本、丹州桑田郡白石村圓覺寺本同國同郡上久保村光瑞寺本等ヲ校輯セシモノナルコト、慶海ノ序ニ見ユ

一拾遺御文ハ、三河國碧海郡荻谷村都路光千代氏ノ編輯スルトコロニシテ皆、實如上人御證判ノ本ニ依レリ。明治十四年三月五日、同村岡本權三郎氏初篇トシテ二十三通ヲ刊行セリ。

一攝州烏養善照寺ニハ、數通ノ真本ヲ藏セルコト、十帖御文校本、及ヒ拾遺御文ニテ知ルベシ。其中「願行具足」ノ御文ハ、古來宗學上ノ要論トナリタルモノナレハ特ニ之ヲ別鈔セリ。

一山科連署記、空善日記ハ、明和四丁亥歲三月京都書林永田調兵衛開版ノ本ニ依リ、明治三十三年四月文學博士前田慧雲氏ノ編輯セル真宗

法要拾遺第五卷所載ノ本ヲ以テ校讐セリ。

四

一蓮如上人御物語ハ、正徳第三癸巳年五月京都書林河南四郎右衛門開版ノ本ハ、片假名一卷ナリ。然ルニ、安永九年庚子正月知慶ノ校讐セルヲ、明治十七年十一月京都書林丁子屋西村九郎右衛門ノ補刻セル本ハ平假名二卷トセリ。知慶ノ序ニハ、此ノ書ヲ天正八年僧都俊公ノ清書セル者ト云ヘリ、即チ兼俊實悟尊老ノコトナリ。今ハ丁九ノ二卷本ヲ大體トシ、一卷本ヲ以テ校合セリ。理綱院慧琳講師ノ真宗法要附録ニ「蓮如上人御物語、コノ書ハ實悟記及御一代問書ヲ略出シタルモノナリ」トアルハ、此ノ御物語ノコトヲ云フナルベシ。

一蓮如上人ニハ、和歌謠曲ノ御作多キ由ヲ傳フレトモ、今ハ、越前法雲寺所傳ノいろは歌四十七首ト、相州真樂寺所傳ノ謠曲國府津トヲ收ム。

一いろは歌ニ就キ、先啓目錄ニ曰ク、有二一本、一本真蹟在ニ松任本誓寺、又一本應ニ道秀請ト、此ノ又一本ト云ヘルハ、法雲寺所傳ノ本ナル

ベシ。

一蓮如上人御著述ノ中ハ、真宗教要鈔二卷ト、一宗心得之事トヲ收メタリ此二書ハ、諸家ノ評語一ナラズ。理綱院慧琳講師ノ真宗法要附録ニ曰ク教要鈔、コノ鈔ハ蓮如上人ノ撰ニテ、加州仰誓寺ノ真本ヲ以テ印行スルヨシミヘタリ、然ルニ、文中、當流ノ義ニアラザルコトアリ、マタ、メツラシキ譬喩ヲ出シ、對句ニ文章ヲカザルコト、コノコロノ詞ニ近シ、蓮如上人ノ作述トミヘズ、疑ハシキニハ、ヨラザルニシクハナシト。

本願寺派陳善院僧樸師ハ真宗法要藏外諸書管窺錄ニ曰ク、真宗教要集(前田博士法要拾遺第一卷所引ニハ真宗教要鈔ニ作ル)管窺曰、コノ作者ハヨホト博ク物ヲシリタル人トミヘテ、書ノ體、文筆モ鄙俚ナラズ、種々比事引喩イツレモニヲモシロク、安心モ正シキ人トミヘテ、宗意ニ害ナルコト一處モナシ、爾レトモナカク、蓮祖ノ撰トモオモハレズ、小巧ヲマハシテ利口ゲニミユ、大善知識ノ口氣ニハ非ズ、故ニ、雜著ノ中、正シキモノト定ムベシ

先啓目錄ニ曰ク、真宗教要鈔二卷、文中、雜行雜修不審、但可謂ニ老婆親切、真筆在ニ仰西寺本誓寺ト。

一宗心得之事ハ、評家多ク上人ノ真撰ナルベシト云ヘリ。

管窺ニ曰ク、一宗心得之事、華藏寫本、蓮祖ノ真撰ナルベシ、詞モユウニ義モ正シク、大善知識ノ口氣ヲノツカラカウバシト。

先啓目錄ニ曰ク、一宗心得之事、或題曰ニ宗意集ト。

玄智ノ真宗教典志卷一ニ曰ク、一宗心得之事、一卷五紙半、凡八箇條評家云、應ニ是蓮師ノ真撰ト。

然レトモ、大谷派ノ先輩光遠院慧空講師ノ假名聖教目錄ニモ、理綱院慧琳講師ノ法要附録、及ビ淨土真宗書目中ニモ見エザレバ、二師共ニ此書ヲ見ラレザリシニハ非ル歟。

一實悟記拾遺(内題蓮如上人御法語)二卷モ、全書拾遺中ニ收ムル考ナリ

シモ、御一代聞書等ト相違ノ點多キヲ發見シタレハ、之ヲ削除スルコトトセリ。

教典志卷一ニ曰ク、實悟記拾遺二卷、内題曰ニ蓮如上人御法語、明和五年冬先啓校刻、槩與蓮師御物語、山科連署記同ノ類、與真宗法要所載實悟記體製全異、卷末所錄追善勸章、恐非蓮師ノ真作ト。

然レトモ、南條博士所藏十帖御文校本第八卷ニモ出デタレバ、左ニ、其ノ全文ヲ舉ゲテ、後賢ノ考ヲ待ツ。

御文曰(淨願寺本七十三、西光寺本廿九、實悟記拾遺)

ソモノ。人ノ後世トムラフニトリテ、マツ中有ノアヒダ善惡ノ生處、サダマラザルサ
キニ、ヨク功德ヲ修シテ惡道ニチトサズ善處ニ生ゼシメント廻向スル時分アリ。ソノ生
處サダマリヌル後モ、惡趣ナラバ善處ニモ生ゼシメ、善趣ナリトモ、三界ノウチチハナ
レテ極樂ニ生シ佛果ヲ證セシメンガタメニ、コレヲトフラフベキモノナリ。中有トイ
フハ、十王ノ裁斷ナリ。チヨス、人ノ死セル宿ニハ、閻王モツカヒチツカハシテ、娑婆ニ

附言

イカナル追善チカ修スルト檢知シ、亡者モ肝チクダキテ遺跡ニイカナル善根チカイト
 ナムトコレチケイマフ(儀望)。スモシコレチ修セズ。(ザレバ)コレチカナシミテウレヘ
 手ソヘナゲキチマスナリ。アトニトマル人、イカテカ佛事チ修セザランヤ。サレバゴ、
 ロザシノ厚薄ニヨリ、修善ノ淺深ニコタヘテ、十王ノウチ、一王ニ王ノ截斷ニアフテ出
 離スルモノモアルベシ。乃至一周忌第三年ノ斷罪チカウムリテ得脱スル人モアルベ
 キナリ。第三年マタ十王ニアヒヌル後モ、アルヒハ二十三年アルヒハ二十三年ナンド
 マデモ、ソノ追善チイダスコトハ、聖教ノ中ニアキラカナル議(説)ナシトイヘドモ、我
 朝ノ風俗トシテ人コレチ修シキタレル。セメテモソノ恩チ報シ、イクダビモソノ生處
 チトウラハ(弔)ンガタメナリ。コレマタイマノ生緣未合(含)中有恒存トイフ義ナラ
 バ、時節チサ、ザルウヘハ、モトモ道理ニカナヘリ。ナカントク死亡ノ日ニトリテ、一年
 ニ一度ノ正忌チ忌日トイフ、一月ニ一度ノ忌辰チハ月忌トイフ。月忌ナチモテ
 等閑アルベカラズ、イハハヤ忌日チヤ。サレバ年チ經トイフトモ、カノ忌日チムカヘテ
 ハ世間ノ萬事チサシオキテ、カナラズ菩提チカザルベキモノナリ。カノ死スル日アルヒ

八月忌トナツケテ忌ト稱スルナリ。忌トイフ文字ノ訓チバイムトヨムナリ。コレ則チ
 ソノ忌日ニガヒテ、カノ徳チ謝スルヨリ外ニ他事チワスレテ禁斷スルナリ。外典ノ書ニ
 禮記トイフ文ニ、コノ義チアカセリ。又内典ニハ梵網經ニ、モシハ父母兄弟死亡ノ
 日ハ、法師チ請シテ追善チ修スベキ旨チトケリ。二親ナラビニ兄弟等ノ忌日ニハ、諸
 事チナゲステ、佛事報恩チイトナムベキ事、内外ノ兩典ニス、ムルトコロ一同ナリ。
 ソノ追善ニチヒテ、カノ亡者今生ニ惡業モフカク、修シタル善因モナクシテ、流轉
 ノ報チウケンコトハウタガヒナケレバ、ソレガタメニハイソギテ善根チ修シテ、トモニ
 功德チ行シテ追善チイダスベシ。追善ノ分齊ニ仍テ、善惡ノ生處サダムベキガエヘ
 ナリ。然ルニ念佛ノ行者ハ、信心チウル時、横ニ四趣(流)チ超斷シ、コノ穢身チスツル
 時、マサシリ法性ノ常樂チ證スレバ、十王ノ前ニイタルベキニアラズ、地獄ニチツ
 ル人、淨土ニ往生スル人、中有ノクラキチエザレハ、カタノゴトク往生人ノタメニハ、
 アナガチニ善根チ修セズトイフトモ不足アルベカラズトイヘドモ、自身ノ行業ノウヘ
 ニ他ノ功用チクハヘバ、極樂ニ生ズル人モ、ナチソノ位モス、ミ、イヨク衆生化

度ノチカヒモ自在ナランコト、ウダガヒナシ。ソノウヘ恩ヲ受テ恩ヲ報セザレバ、ワガ
加モナク、徳ヲ荷テ徳ヲ報セザレハ、ソノ徳カヘリテアタトモナルナリ。カルガユヘニ眞
實念佛ノ行者ナリトモ、報恩ノツトメオロソカニスルコトアルマジキコトナリ。ア
ナカシヨク

(本文中)セルハ實悟記拾遺ノ文ナリ

御一代聞書第十條、第一百八十條等ノ仰セノ意ト對照シテ、考フベキコト
ナリ。

一 全書拾遺部ノ編輯ト校合ニハ、可及的注意ヲ拂ヒタレドモ、尙遺漏アラン
ヲ恐ル。他日更ニ補修スルコトアルベシ。

一 全書正編ニ收メタル正信偈大意、蓮如上人遺徳記、蓮如上人御一代記
聞書、實悟記ノ四部ハ、大須賀秀道氏ノ眞宗假名聖典ニ依レリ。

一 全書ノ編輯ニハ、南條博士ノ監修ヲ煩ハシ、特ニ秘藏ノ漢文正信偈大意
十帖御文校本、光遠院慧空講師所傳ノ帖外御文等ノ恩借ト、慧燈大

師年譜ヲ附スルコトヲ許サル。上杉文秀、高橋久丸、一柳知成、佐久間資
順、原宜賢、水谷魁暉等諸君ハ、懇切ナル注意、又ハ資助ヲ與ヘラレ。謠
曲ニ就キテハ、鶴澤名門二氏ノ注意ヲ得タリ。謹テ謝ス。

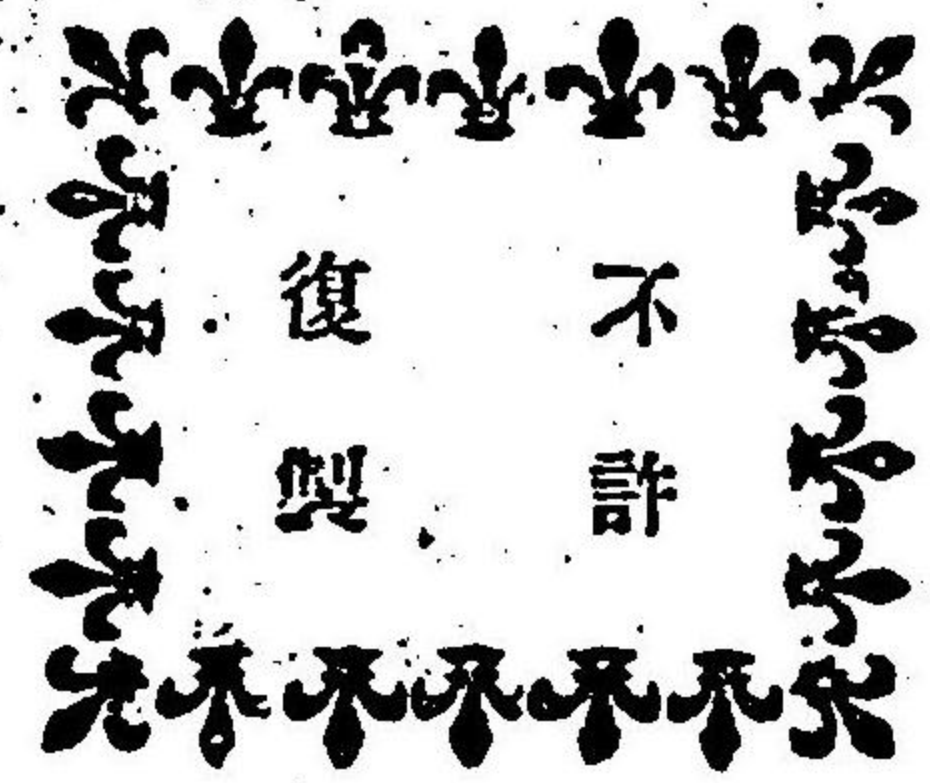
明治四十年五月十七日 尾州城南蓬月山房ニ於テ

住 田 智 見 識ス

蓮如上人全書例言終

明治四十年七月一日印刷
明治四十年七月五日發行

上製定價壹圓
特製定價壹圓五拾錢



編輯者 住田智見

發行者 西村七兵衛

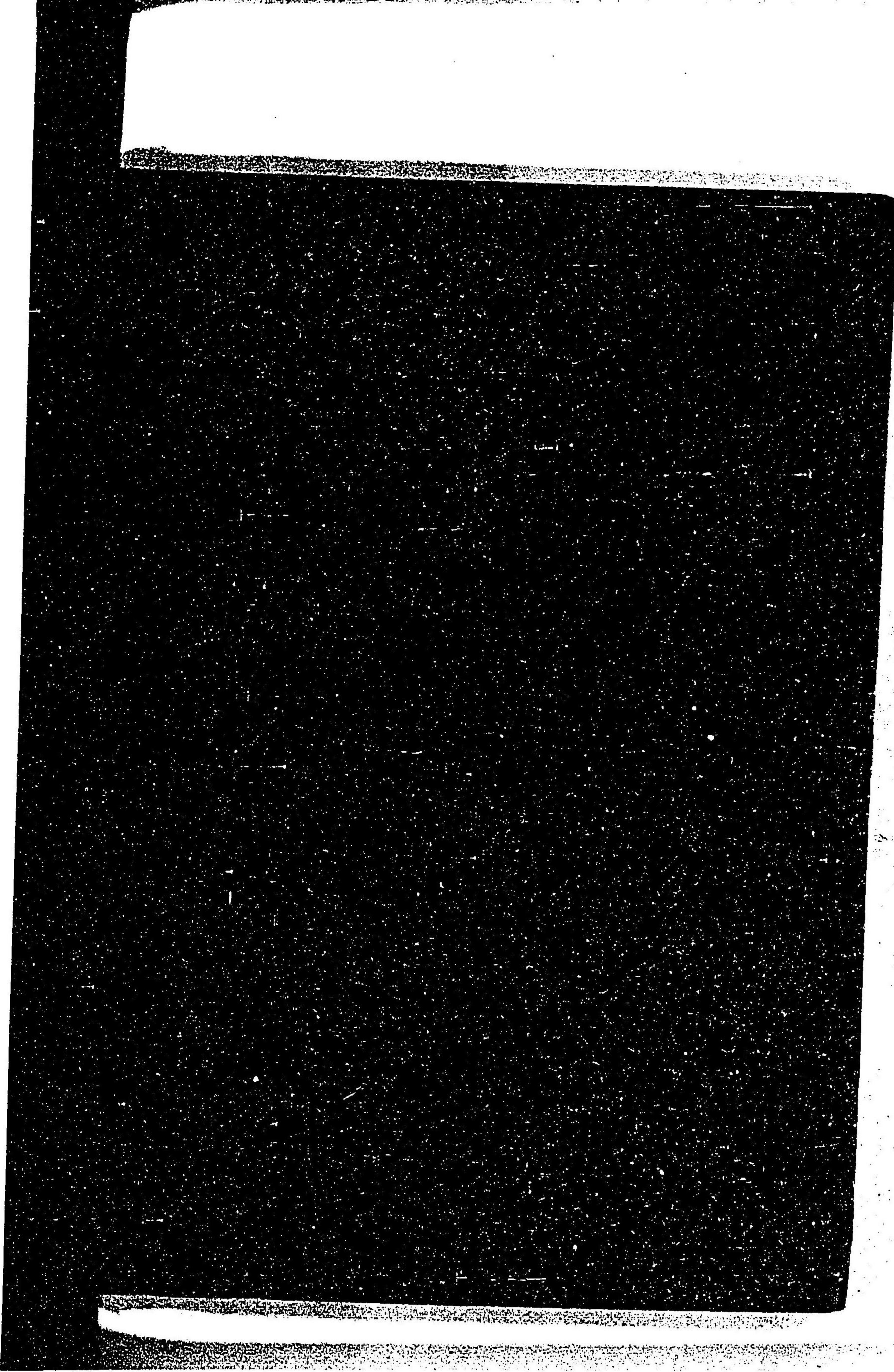
京都市下京區中珠散屋町烏丸東入
廿八番町二十二番戶

發行所

京都市東六條
電話貳貳五八番
口座貳五四番

法藏館

53
502



019289-000-2

特61-476

蓮如上人全書

住田 智見/編

M40.7

ABF-2928

